

琉球大学学術リポジトリ

主体的・協働的な学習を目指した授業づくり：
班での学び合いを取り入れた物語文の指導を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡口多, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36793

主体的・協働的な学習を目指した授業づくり

一班での学び合いを取り入れた物語文の指導を通して一

渡口 多恵子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・那覇市立天妃小学校

1. テーマ設定の理由

「中央教育審議会企画特別部会論点整理」(2015)においては、学力は改善傾向にある一方で、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識等の課題が指摘されている。また、平成28年度全国学力・学習状況調査小学校国語の結果からは、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の文を関連づけて理解を深めたりすること等の課題が指摘されている。

これらの課題に対応するために、「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を新しい時代に必要となる資質・能力の3つの柱として、子どもの主体的・協働的な学びの充実が求められている「中央教育審議会企画特別部会論点整理」(2015)。

しかし、筆者のこれまでの実践を振り返ると、主体的・協働的な学びを充実させるための児童の交流において、根拠や理由を述べることができない児童や意見を述べることに抵抗を感じている児童もあり、一部の児童の意見で話し合いが進むなど、児童同士の学び合いを進めることに課題がみられた。

学び合いを効果的に進めるためには、児童が安心して話すことができる場をつくり、自分の考えを表現できる機会を増やし、他者と関わりながら学習することが日常的に行われるようにすることが大切だと考える。自分の考えを述べたり、他者の考えを聴いたり、教え励まし合いながら、互いの理解を深め、主体的・協働的に学ぶ力を育むことができる授業の展開を考えていきたい。

今回、国語科の物語文の指導を通して、児童それぞれが力を発揮し、多様な意見を交流させ、協働的に学ぶ経験を重ねることにより、主体的に目的や課題を追求するための力が育つのではないかと考える。

以上のことを踏まえ、本研究では、班での学び合いを取り入れた物語文の授業実践をとおして、児童の主体的・協働的に学ぶ力の育成を検討していくこととした。

2. 研究内容

(1) 国語科「物語文」の指導

上谷(2015)は、文学作品の読み方の関係として3つのアプローチを示している。1つ目は作品を書いた作者の意図を追求する読み方であり、作者の伝記的事実やその作者の他の作品と照合することで一定の意図を推定していく読み方である。2つ目は、その

作品の文章構造や表現の分析をもとに一つの解釈を構築していく読み方である。3つ目は自身の生活経験や読書経験、学習経験に基づいてその作品を味わう読み方である。

それぞれの読み方は、国語科の目標及び内容と指導事項を踏まえ学年に応じて扱われている。特に、読者自身の経験に基づいて作品を味わう読み方は、児童の能力差に関わらず多様な読み方や感じ方を伝えることができ、それぞれの経験に基づく作品の読み味わい方の交流が可能となり、自分では気づかない考えに触れる機会となり、個々の児童の読み方がさがに深まることが期待できる。

(2) 学習班の構成と教育効果

班で学び合うとは、単なるグループやペアと違い、目的・目標に向かって学習に取り組むとともに、励まし合って活動する小集団での学びと捉える。吉本（1976）が学習班の教育的効果についてあげている4点を以下に示す。

- ・班によって学習への全員発言、全員参加を保障することができる
- ・班では生活経験や本音がだしやすく、多様な意見をださせることができる
- ・班では子どもたち相互の意見を交流・援助・批判しやすい
- ・班を中心とすることで、子どもたちは学習への諸要求を提出したり、共同的な学習規律をつくりだしたりすることが容易となる

授業で班活動を組織することによって、子どもたち同士の相互作用を引き出し、多様で豊かな思考やイメージをつくることを期待できる。授業外の学びもまた班で共有することで学ぶ意欲を高め、互いの理解や学び合う関係づくりにつながると考える。

(3) 国語科における交流活動について

現行の「小学校学習指導要領国語編」には、「C読むこと」の指導事項として「自分の考えの形成及び交流に関する事項」が全学年を通して新設され、示されている。

宮島（2015）は、物語や小説を読むという学びでの話し合い活動の目的について、「この活動がめざしているのは、自分と他者とが互いのものの見方や考え方を関わらせ、その意味や価値を検討し、それぞれが個人では得られない学びを経験すること」とし、交流活動を貫く目的について述べている。また、「個人では得られない経験」として、「できるだけ様々な見方や考え方に触れ、それらを優劣や正誤に関係なくまずは受け入れる（広げる交流）」、「共通点・相違点・矛盾点・心が惹かれるかといった観点で分析と考察を加え、対象への認識を深める（深める交流）」、「新しいものの見方や考え方を創造・発見する（高める交流）」の3つを挙げ交流の系統性を捉えている。さらに、交流することによって成立する人間関係も活動の一環としてまとめている。「広げる、深める、高める」という交流活動での学びのイメージをもつことで、国語科「読むこと」の領域で育むべき能力を育てることができる。

3. 課題発見実習

(1) 公立 A 小学校での実践計画

① 学習班を使った6学年の指導

単元名 「物語の世界を想像して書こう」

使用教材 物語文「きつねの窓」（教育出版6年下）

対象 6年2組（男子20名、女子15名、計35名）

② 単元計画（表 1）

登場人物「ぼく」、「きつね」の視点に気をつけて読み、物語の世界を想像させる。班で交流する課題は、答えや理由について子どもたちの多様な考えがでるものを設定する。

個人で考え、学習班、全体交流というように学習を進めながら、自分の考えを広げ、深めていけるようにする。

7時間計画のうち3回大学教員が授業を実施し、筆者は学習班の使いどころや課題の内容、児童への発問や助言、児童の反応、板書等を授業観察し確かめた。

表 1 単元計画

時数	主な学習テーマ	アプローチ	学習形態
第1時	題名、全文を読み、疑問や感想を書く。学習の計画を立てる。 <u>登場人物の心情の変化を考えて読む</u>	作品の文章構造や表現の分析をもとに解説を構築。 読者自身に注目	全体
第2時	きつねが独りであることに気付き始める「ぼく」を読み取る。(大学教員による授業)		導入 班(音読)
第3時	『「ぼく」が感激したのはなぜか?』をテーマに読む。		展開 個→班→全体 (テーマについて)
第4時	「きつねがほしかったもの」をテーマに読む。 (大学教員による授業)		
第5時	「窓からみえたもの」をテーマに読む。 (大学教員による授業)		
第6時	「2度と現れなかったきつね。」「ぼくは何が変わったか。」をテーマに読む。(写真1)		まとめ 個→班
第7時	自分が「きつねの悪」をつくったら何が映ると思うか考えて書く。		(振り返り)

③ 学習班の構成

学習班について担任からの事前の聞き取りでは、他者の意見を否定するような強い言葉があり喧嘩になるため班活動はあまりできないということがあった。そこで、班構成は担任が児童と相談し、「学び合いができるもの同士、男女混合」という条件のもと児童が互いに話し合っ決定した4人組みで行った。

④ 学習班の活用

授業の導入・展開・まとめの3つに分け、1回ずつ班活動を取り入れた。

授業の導入（10分）・・・音読を班で行う。（簡単な課題で関係づくり）

展開（30分）・・・問いの中の1つを班で交流する。（学びを深める）

まとめ（5分）・・・学習の振り返りを班で行う。

班での学習の進め方として、溝部（2014）の行った班活動の役割分担の仕方を参考に「問題を確かめる・司会をする・ほめる・発表する」という役割を割り当てるカードを各班に配布して役割を分担させ、話し合いの手順や約束を確認して行った。今回、発表の担当は、意見をまとめて発表するのではなく、話し合いの中でより良いと感じた意見の発表を行うようにした。また、分担を交代することでそれぞれの役割を経験できるようにした。

(2) 授業の実際（成果と課題）

授業の導入で音読を班で行ったことで、読みの確認ができ学習の雰囲気も程よくつくることができた。児童の感想からも「最初に班で音読して進めるのでわかりやすく楽しかった」とあった。展開では、大学教員の授業を参考に、中心発問に導くための前段となる発問を取り入れて考えさせたことにより、徐々に挙手をする児童が増え、学習への抵抗感を低くする効果がみられた。本時のテーマに関する中心となる発問について考えることを（個人思考→学習班の交流→全体の交流で）行うことで、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点に気づくことができた。

また、自身の生活経験や読書経験、学習経験に基づいてその作品を味わう読みができ

るようにしたいと考え「自分ならどうか」というように児童自身が現れる課題設定も検討した。それまでの学習を通して考えたことをいかしながらそれぞれに表現することができきていた。班や全体交流でも多様な意見がみられた。

学習班での交流について児童の感想からは「みんなの意見が聞け、自分の考えも深めることができるから好き」等、肯定的な感想が多くあった。また、学習班での交流の設定を

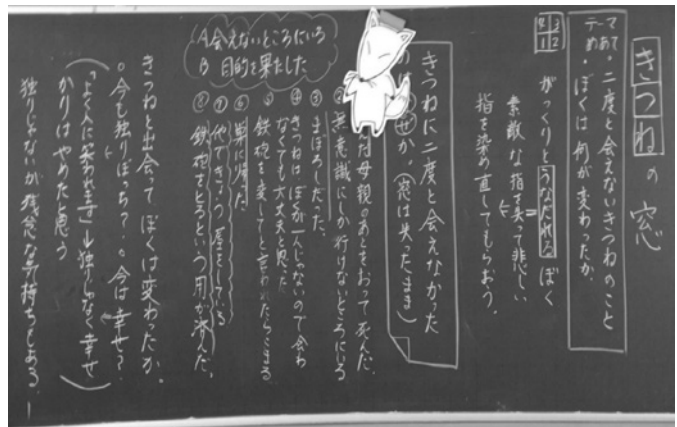


写真1 第6時の板書

することにより、あまり発言のなかった女子の中から全体交流でも発言する場面がみられた。発言できた理由については「発表しやすかった」、「先生が発表してみたと声かけしてくれたから」と、学級の雰囲気や教師の働きかけが要因になっていた。しかし「文句を言う人がいるから好きではない」という児童が数名いた。班への働きかけがさらに必要である。また、児童の記述内容をみると根拠や理由を書けていない児童がいた。単元テストでも達成率の低い問題があった。授業の中で叙述をもとに人物像や表現の工夫などを捉える発問が十分ではなかったと考える。物語文の主語に着目した教材分析や発問を意識して行えば、叙述を捉えた読みができるであろう。

4. 今後の研究の方向性

(1) 公立B小学校での実践

学習班を使った5学年の指導

単元名「本のすいせんをしよう」(表現のくふうや登場人物の性格を考えよう)

使用教材 物語文「雪わたり」(教育出版下5年)

対象 5年1組(男子20名, 女子13名, 計33名)

(2) 本研究に向けて

- ・物語文の授業づくりにおける観点の明確化
- ・主体的・協働的な学習の成果を検証するために観点を設定する
- ・班への働きかけ(個の意見を尊重する, 根拠を添えて表現する)
- ・交流の場を日常的に作ることと教科の学習に生かすこと

文献

上谷順三郎(2015)。「文学作品の読み方指導と文学教育」高木まさき・寺井正憲・中村敦雄(編)『国語科重要用語事典』明治図書, p. 256.

溝部清彦(2014)。「『ドタバタ授業を板書で変える』高文研, pp. 44-48.

宮島卓朗(2015)。「広げる・深める・高める交流」藤原裕治・宮島卓朗・八木雄一郎(編)『シリーズ国語授業づくり交流: 広げる・深める・高める』東洋館出版社, p. 62-63.

吉本均監修(1976)。「『学習集団研究5』明治図書出版, p. 8.